

# 令和5年度(2023年度) 自己評価結果公表

社会福祉法人ふじみ野会  
子どものその幼保連携型認定こども園

## 1. 本園の教育・保育目標

子どものその保育生活協同組合から55年余り積み重ねてきた保育実践をもとに、一人ひとりの子どもを大切に、自然のなかで友だちと感動を共有してあそび、子どもたちが人とつながり生きる力を育てることを念頭に保育実践を行う。

平成27年4月から幼稚園機能と保育園機能を併せ持つ幼保連携型認定こども園として一体的な教育・保育を行う。

### 【私たちの願い(教育保育理念)】

豊かな自然	自然の中でのびのびと子どもを育てます
あたたかな人間関係	おとなの愛情と仲間の中で子どもを育てます
本物の文化やあそび	豊かな文化やあそびの中で子どもを育てます
地域とともに	園と家庭・地域が一緒になって子どもを育てます

### 【私たちのめざす子ども像(教育保育目標)】

- 友だちと思いきりあそび、自分の気持ちを素直に表現でき、人とつながって生きていく子ども
- 何にでも興味・関心を持ち、自分でやってみようとする子ども
- 失敗を恐れなくて挑戦し、仲間とともに学び、その経験を生かす子ども
- あそびの中でからだを動かす楽しさがわかる子ども
- 生活習慣を身につけ、健康な生活ができる子ども

### 【重点目標】

- 幼保連携の特色を生かした保育・教育内容の構築に努める。
- 乳児期はあたたかい人間関係の中で安心して過ごし、自我の芽生えを大切にする。
- 幼児期は、大人の愛情を受け、自然の中で仲間と交わりのびのび遊ぶ中で自己肯定感を育てる。
- 友だちと力を合わせて活動に取り組み、話し合い活動を行っていく中で、自分で考えて、主体的に行動する力を育てる。
- 幼児中心の子育て支援の取り組み(うさぎの広場)だけでなく、乳児を中心とした子育て支援(赤ちゃんのつどい) プレ保育の残り組みを始め、地域の未就園児のその保護者を支えていく。

### 3. 評価項目の取り組み状況

評価項目	取組み状況
教育・保育内容について	<p>新型コロナウイルスが5月から5類になった事で、ほぼ以前のような日常生活を送ることが出来るようになった。</p> <p>乳児担当の職員は、チームワーク良く子どもたちの日々の成長を丁寧にみていった。0歳児クラスでは、高月齢の子が1～3月生まれの子に気持ちを寄せていく姿と子ども同士の気持ちの交流があり、乳児期の友だちとのかかわりやつながりの芽生えを実感した。</p> <p>異年齢の交流も出来るようになり、お互いに交流をする事で、年長組へのあこがれの気持ちや小さい子どもへの優しい気持ちが育ってきている。</p> <p>子ども達との距離等を考えず、どの子とも近い距離で接する事が出来て、スキンシップをたくさん行い、大きな声で笑い合える保育を行える事が、子ども達にとっても担任にとっても大事な事である事を再確認した一年だった。</p> <p>「山登り」「合宿」「運動会」「人形劇」など様々な行事をコロナ前のように行う事が出来、ひとつひとつの行事を終える事で、クラスの仲間意識や友だち関係が広がりが深まった。</p> <p>3学期の最後には、年長組の子ども達は、子どものその「私たちのめざす子ども像」に近い姿で卒園する事が出来たのではないかと思う。</p>
教育・保育内容の保護者への周知	<p>毎月、各クラスや各年度で作るカリキュラムで、子どもの姿やその月に取り組む全体的な保育内容を伝えてきた。また、日々のクラスや子どもの活動の様子もクラス新聞で伝えてきた。</p> <p>クラス会を年間通して行う事が出来て、園の方針を伝え、なおかつ、保護者の話を聞いたりする事が出来た。また、希望者には7月に個人面談も行い、保護者の悩みなどを聞きながら支援を行ってきた。</p> <p>運動会も3年ぶりに全園児で行う予定だったが、らいおん組が学級閉鎖になってしまい、当日はらいおん組抜きでの開催となった。しかし、その後、平日に年長組のみでの運動会を行い、らいおん組の子ども達も運動会を経験する事が出来た。</p> <p>親子そのまつりでは、去年は各年度事に時間を決めて開催したが、今年度は以前のようなすべての年度が一緒に参加する形で行った。それに伴い、親子そのまつり実行委員を選出してもらい、保護者中心で行った。保護者の方からは、「他の保護者とも仲良くなれました。」「楽しかったです。」と言った意見が多く寄せられ、そのが大切にしている保護者同士のつながりが持てる切っ掛けになった。子ども達も親子で伝承あそびを楽しめた事によりよりあそびの幅が広がったのではないかと思う。</p> <p>保育参観、お父さん参観、作品展等、保護者を呼んでの行事をする事が出来た事で、子どものへの関わり方や園の保育について理解してもらった切っ掛けになった。</p> <p>外部講師を呼んでの「ひだまり講演会」も行い、参加された保護者に絵本の大切さを伝える事が出来た。</p>

給食と食育	<p>多様な食物アレルギーに対応する中、ヒヤリとする場面を無くすためアレルギーカードを記入式に変えて5年目になった。</p> <p>給食室側と保育側の双方が記入し互いにチェックすることでミスは大きく減ったが、それでも数回のミスがあり、その都度、職員でミスが起きた原因や今後の対応策について話し合ってきた。毎月の夜会議では、必ず各クラスの報告の中に、「給食について」を報告し、保育現場との意見を交流し、メニューの改善も行った。</p> <p>旬の食材の枝豆やトウモロコシなどの皮むきなどをクラス単位で体験させることが出来た。また、竹の子ご飯の前に、竹の子を見る、年長組は給食室見学を行う等、給食室と連携しながら食育の取り組みを行ってきた。</p> <p>年長組は、自分たちで野菜を育て、収穫し、調理をする事で、野菜が出来るまでの過程を知るなど食育の取り組みも行った。野菜が苦手な子どもが、自分たちの収穫した野菜なら食べる姿も見受けられた。また、他の年度でも野菜栽培を取り組むクラスがあった。</p>
教職員同士の協力・連携	<p>幼保連携を進めるため今年度も幼児クラスは幼稚部・保育部の担任が合同で話し合う年度別会議をできるだけ週1回行うようにした。その中でそれぞれの子どもに配慮する場面や幼保一緒に保育する場面など、認定こども園ならではの特徴と留意するべき点を話し合い、互いの理解を深めていった。若い職員にとって、年度別会議は少人数で自分の悩みを出しやすくアドバイスをもらえる機会であり、色々な事を学べたという声が多くあった。</p> <p>乳児クラスでも、複数担任なので、週1回はクラス会議を行う事で、保育内容の確認や週の見通しなどの話し合いを重ねてきた。</p> <p>職員数の多い認定こども園なので、保育現場だけでなく、給食室、事務所、バスなどの運行管理にかかわるさまざまな職員の意見が反映できるように、合同年度担当会議や、行事の担当者会議などを開くようにした。</p>
研修・研究の充実	<p>文化学校や保育プラザなど様々な研修に参加し、それぞれが学んだことを日々の保育に生かしている。また、中堅職員を中心としたキャリアアップ研修では、マネジメントや保護者支援などで各園の情報に触れ新たな学びとなっている。また、外部講師を園に呼んで、園で取り組んでいるリズムについてを学ぶ取り組みも行った。</p> <p>その他にも、食物アレルギーの子どもが増えている現実がある中、職員会議などで、アレルギーの多様性を管理栄養士から学ぶ取り組みを行った。</p>
健康・安全・衛生管理への配慮	<p>健康・衛生管理面では、新型コロナウイルスが5類になった後も、うがいと手を洗う習慣を引き続き図った。</p> <p>ただ、5月以降は、子どもや職員の手指の消毒、子どもが触ったところの消毒、給食の時のパーテーション、距離をとって保育を行う、常に換気を行う、他のクラスとの交流を控える等、様々な感染対策を行なわなかった。マスクの着用も個人の判断でするようになった。</p> <p>感染対策を行わない事で感染者が増えるのではないかと不安が大きかったが、実際は感染する園児、職員はいたが、学級閉鎖になるような感染拡大は1回のみだった。(この時は、コロナとインフルエンザの2つがダブルで感染した為に学級閉鎖の対応を行った。) 反面、今年度はインフルエンザの流行で、幼稚部で学級閉鎖を行</p>

	<p>ったクラスが4～5回あった。</p> <p>不審者訓練を年数回行った。今までと違い、子どもが自由に遊んでいる時間で訓練を行ったり、不審者がいきなり幼稚部2階に上がるなどの訓練を行った事で、新たな課題が多く見つかった為、その都度、不審者が来た場合の対応策について考えてきた。夕方には男性職員が時間を決めて、園外を見回り、不審者対応を引き続き行っている。</p>
<p>保護者、地域との連携と支援</p>	<p>昨年度も、プレ保育を行った。(親子プレは、2歳児の親子で決まった曜日に子どもそののに来てもらい、月に2～3回一緒に遊んだり、制作をしたり、自然に触れたりしながら給食も親子で食べてもらう取り組みである。)地域子育て支援事業としての「うさぎの広場」「赤ちゃんのつどい」も昨年度同様に行ってきた。</p> <p>子育てが初めてのお母さんたちの悩みを聞いて助言をしたり、赤ちゃんの接し方やあそびを体験してもらう取り組みである。回数を重ねるごとに親同士、あるいは親と職員が気軽に話し合える場になった。</p> <p>令和元年4月から幼稚部の各地域班から運営委員を選出し、幼稚部保護者による運営委員会が始まった。これは、前身の保育生協が大事にしてきた保護者の活動・交流・保育や行事への積極的な参加を認定こども園が引き継ぎ、さらなる発展を目指す組織である。</p> <p>昨年度から、保育部の保護者からも、運営委員を選出してもらい、名称も「子どものその運営サポート委員」に変更し、幼稚部、保育部の垣根を越えて、子ども達の為に取り組む事になった。</p> <p>今年度の「お父さんとあそぼう山登り」は昨年までは5月に行っていたが、猛暑で中止になる事が2回あったので、11月に変更した。紅葉が綺麗な中、親子で山登りを楽しんでいた。山登りを11月に変更した事で、昨年秋に行ったキャンプを6月に変更して行った。ゆっくりとした時間が流れ、各家族で夕飯作りや他の家族との交流が生まれ、本来のキャンプの姿で楽しむ事が出来た。1月の「お父さんと遊ぼう冬のあそび」も開催し、親子で凧あげやコマ大会、カルタを楽しんだ。</p> <p>メリーの会(卒園生活動委員会)主催の行事は、12月にみかん狩りを行い、卒園した子ども達が久しぶりに友だちと再会し、ハイキングとみかん狩りを楽しんだ。</p> <p>ホームページは園を広く知ってもらい地域の方とつながる大切なツールなので、今年度も、更新をできるだけ行うようにした。「赤ちゃんのつどい」や「うさぎの広場」の情報、園の見学会などのお知らせも載せるように心がけた。また、インスタグラムもこまめに更新をしていった。</p> <p>夏まつりでは、3年ぶりに地域の方や卒園生を呼んでの開催となった。保護者の方の手伝いは、最小限にして、ほとんどの事を職員で行い開催しましたが、予想を上回る方が参加して、大行列が出来てしまうなど課題を残す夏まつりとなった。それでも、たくさんの卒園児が参加してくれた事は、卒園生にとって「そのはわがふるさと」という事を再認識する夏まつりとなったのではないだろうか。在園の保護者も親子で夏まつりを楽しんだ。</p>

#### 4、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
幼保連携型認定こども園としての教育・保育の推進	<p>乳児クラスが2階にあるため、乳児の日常の姿が伝わりにくい面がある。乳児の安定した生活を守りつつ、幼児クラスとの交流をいろいろな場面で広げていく。</p> <p>幼児の年度別会議はほぼ週1回行っているが、乳児のクラス会議は不定期だったので、定期的に開けるように会議中の見守り体制を整え、日常の保育の振り返りを大切にしていく。</p>
教職員の資質向上	<p>子ども理解を深めるために、広い視野を持ち、さらに積極的に研修研究活動に取り組めるようにしていきたい。、外部研修や講師を招いての研修も取り組んでいきたい。</p> <p>3年前から行っている「今年の目標」「スキルアップする為に行いたい事」の2つを今年度も書いてもらう。そして、半年、1年ごとに、自分の目標とスキルアップする為に行いたい事に対して振り返ってもらいながら、保育の質を高める取り組みを行っていく。</p>
子育て支援の取り組みの充実	<p>専任の職員を配置し、「うさぎの広場」「赤ちゃんのつどい」の内容をリフレッシュして、子育てを楽しめる雰囲気を作っていく。</p> <p>また、プレ保育を火曜日、木曜日、金曜日クラスで行い、未就園児とその保護者の支援をより積極的に行っていく。</p> <p>保護者同士の交流、仲間づくりを目指し、地域に開かれた園として取り組む。</p>
食育の推進	<p>職員室の職員に、乳児クラスだけでなく幼児クラスの子どもたちの給食時間の様子を時々見に来てもらい、メニューや食材の話をしてもらい、食への興味関心を広げる。</p> <p>子ども達に、枝豆やそら豆をむいでもらうのを手伝ってもらったり、給食の時に、竹の子を見たり触ったりしながら、本物の素材に触れる機会を増やす。</p> <p>年長組は、なすやきゅうり、ミニトマトなどの野菜栽培を行う事で、野菜が育つ過程を学んでいく。また、給食室見学を行い、自分たちが作っている給食がどのように作られているのかを知る。</p>
保護者参加	<p>昨年同様、「子どものその運営サポート委員」の活動で、山登りやキャンプ、冬の遊びを楽しむ。職員と一緒に子ども達の為に、協力して行っていく中で、父親の子育てへの参加を図る。また、「卒園生事業」での取り組みで、山登りなどのイベントを行い、卒園児や保護者との交流を図る。</p> <p>今年度も、夏祭り、親子その祭り、保育参観保護者同士の親睦を深める。また、園長が話す「こどものそのの保育について」の合同クラス会や、外部講師を呼んで、「絵本の講演会」を行う事で、保護者の子育てのサポートを行う。</p>

以上の通り報告します。

令和6年(2024年)3月31日  
 こどものその幼保連携型認定こども園  
 園長 山下 勝